

中国人留学生の来日前と来日後の態度の変化
—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて—
Transformation in Attitudes of Chinese Students Before and After Coming to Japan
—Applying the Modified Grounded Theory Approach—

李 亭 (東京福祉大学)

Ting Li (Tokyo University of Social Welfare)

キーワード：中国人留学生、来日前、来日後、変化、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

1. 研究背景

少子高齢化に伴う人材不足や国際化などを背景に、日本における外国人の数は年々増加している。外国人人口は288万人で、過去最高を記録している(出入国在留管理庁、2020)。外国人人口の年齢構成において、生産年齢人口15～64歳の割合は85%である。そのうち、最も多い年齢層は20～24歳で、次いで25～29歳、30～34歳の順となっている(総務省、2020)。このように、外国人は20歳～34歳が一番多くなっている。若年層のうち、留学生の数が一番多いと推測される。

外国人留学生在籍状況調査によると、2020年現在の外国人留学生は279,597人、中国人留学生が一番多く121,845人となっている。外国人留学生は、日本での就職が決まると、留学ビザから就職ビザに切り替えて、地域に住み続ける可能性が高い。留学生自身の意向では、卒業後の進路として約6割が日本における就職を希望している(日本学生支援機構、2020)。日本の留学生政策は、グローバル戦略を展開する一環として、高度外国人材受入れ、優秀な留学生を獲得することである(文部科学省、2008)。そして、外国人留学生は出身国と日本の架け橋として、日本の教育機関の定員充足、教育の国際化をもたらす存在として期待されている。

2. 先行研究

中国人留学生の約9割以上が私費留学である。一般的に来日の動機は、学問や知識の習得を目指す「苦学型」、海外生活を楽しむ「享楽型」、職場への不満や家庭の不和などから海外脱出を実行した「逃避型」、アルバイトを狙う「出稼ぎ型」という四つのタイプに分けられるが、現実には複合型が最も多い(班、2004)。日本留学動機について、主に「見識の増強、他国文化の理解」「先進的知識、技能の学習」「先進的教育の享受」「職業総合競争力の増強」である(王・苗、2013)。

来日前、対日観や日本人イメージについて、好感派が24%、反感派が11%、中間派が65%という結果だった。日本のプラスイメージは、「日本は先進国である」「日本の多くの人が豊かな生活を送っている」「マナー意識が強い」「環境がいい」「日本の技術は先進的」「医療発達」「日本人は真面目・勤勉・責任感があり・忍耐力が強い」と考えている人が多い。一方、日本のマイナスイメージは、「物価が高い」「軍国主義」「外国人が住みにくい」「歴史的感覚が悪い」「日本文化は閉鎖的」「日本人は排他的・冷たい」「男尊女卑」「上下関係が厳しい」と思っている人が多い。来日前に約7割以上の中国人留学生が日本人と接することがなく、イメージの形成は主にマスメディアや学校の教育によるものであった(鄭、2008)。

来日後、人間関係や自分自身の問題、環境違いなどによるストレスが高かったと報告している(姚・松原、1990)。日常生活で日本語の困難、勉強面の困難、経済の困難が大きいと示されている(徐・蔭山、1994)。日本人との人間関係、日本人の考え方・価値観の領域になれるまで最も時間が必要であると指摘した(村田、1994)。中国人留学生は、交流領域(コミュニケーション)は、言語領域(日本語能力)、勉強領域、文化体験領域と比べて満足度が低い(岡・深田・周、1996)。

3. 研究目的及び研究方法

これまで、中国人留学生についての研究は、主に異文化不適合や生活上の困難に焦点を当てたものが多く、来日前と来日後の態度の変化についての研究はほぼ見当たらない。そこで、本研究では、中国人留学生が日本留学を通して、自身にどのような変化があったかを調査することにより、その変化をもたらす要因を検討することを目的とする。本研究は、中国人留学生に効果的な援助を行い、適応を促進し、生活の質を高めることに役立つものとする。

本研究の研究方法は、中国人留学生の来日前と来日後の態度の変化を探るという目的に即して、質的研究の方法を用いた。新型コロナウイルスの感染拡大により、オンラインインタビュー調査に変更となった。調査対象者は中国人留学生 30 名であり、調査期間は 2020 年 9 月である。分析方法は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。このアプローチを採用したのは、中国人留学生の来日前後を比較し、時間の流れを考慮した「態度の変化のプロセス」を検討することが、プログラムの質を高めることにつながると考えたからである（木下、2007）。

4. 結果

本研究では、中国人留学生のインタビューデータに対して質的分析の結果、「外的変化」「内的変化」「対人関係の変化」「ポジティブ感情の変化」「ネガティブ感情の変化」という 5 個のカテゴリーを生成した。「環境の変化」「資源の変化」「身分の変化」「社会参加の変化」「生活習慣の変化」「行動の変化」「自由度の変化」「選択の変化」「学習態度の変化」「視野の変化」「考え方の変化」「心理の変化」「認知の変化」「価値観の変化」「目標の変化」という 15 個のサブカテゴリーが得られた。

来日後の「外的変化」は顕著にみられ、例えば、礼儀正しくなった、時間やルールを守るようになった、挨拶の時にお辞儀をし、頷くようになったなど。来日後の「内的変化」はゆっくりと変化した。例えば、依存から独立への変化、高欲望から低欲望への変化、物質重視から精神重視への変化、自己中心から他人配慮への変化、結果重視から過程重視への変化などである。来日後の「対人関係の変化」は、日本人と同じように人と距離を保つようになる傾向が現れた。来日後の「ポジティブ感情の変化」の理由は、自分が成長した、日本語能力を高めた、対日観や日本人イメージがよくなったなどがある。来日後の「ネガティブ感情の変化」の理由は、主に差別経験、異文化への不適応、経済的困難、学業や進学 of 困難などである。

5. 考察

本研究は、中国人留学生の来日前と来日後の態度と比べて、様々な変化が生じたことを明らかにした。それらの変化は個人差がある。「外的変化」は、アルバイト先や日本人と接することで自然に身に付いた結果である。「内的変化」と「対人関係の変化」および「ポジティブ感情の変化」の要因は、自ら日本に来て、日本で暮らして、日本人と接して、日本で教育を受けて、少しずつ日本に適応した結果であると考えられる。「ネガティブ感情の変化」の要因は、主に日本文化や生活習慣に対する拒否的態度であり、日本のマナーやルールを守らずに差別された経験によるものである。「ネガティブ感情の変化」は、来日前の日本崇拝から来日後の日本批判へと変化する可能性が高い。

参考文献

1. 王輝耀・苗緑, 2013 「国際人才藍皮書・中国留学発展報告 (2013 年 No. 2)」, 社会科学文献出版社
2. 岡益己・深田博己・周玉慧, 1996 中国人私費留学生の留学目的及び適応, 岡山大学経済学会雑誌 27, 25-49 頁
3. 木下康仁, 2007 『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』 弘文堂, 69-87 頁
4. 出入国在留管理庁, 「在留外国人統計」 (2020 年 6 月末)
5. 徐光興・蔭山英順, 1994 在日中国人留学生の適応に関する実体と問題, 名古屋大学教育學部紀要, 教育心理学科, 41, 39-47 頁
6. 総務省, 「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数」 (令和 2 年 1 月 1 日現在)
7. 鄭玉善, 2008 中国人留学生の来日前の対日観調査報告とその要因考察, 名古屋大学留学生センター紀要 6, 5-16 頁
8. 日本学生支援機構, 「2020 (令和 2) 年度外国人留学生在籍状況調査結果」 (令和 2 年 5 月 1 日現在)
9. 班偉, 2004 中国人留学生の異文化不適応と日本コンプレックス, 山陽論業, 第 11 巻, 105 頁
10. 村田雅之, 1994 留学生の「適応に要する時間」に関する分析, 飯山論叢, 11 (2), 88-105 頁
11. 文部科学省, 2008 「留学生 30 万人計画骨子」 (平成 20 年 7 月 29 日)
12. 姚霞玲・松原達哉, 1990 留学生のストレスに関する研究 1 生活ストレスを中心に, 学生相談研究 11, 1-11 頁